

ビーだま

ビーだまのように、キラリと光る一冊を

2020年1月～12月に発行された本の中から、とくにおすすめの本を紹介します

<編集・発行> 富山市立図書館 富山市西町5番1号
電話 076-461-3200

令和3年4月23日発行（年1回発行）

メイドイン十四歳^{さい}

石川宏千花／著 講談社

顔や手など、肌が見える部分を全て包帯でぐるぐる巻きにした転入生が来た。特殊な脳波の影響で周囲には姿が見えないからだという。そんな浅窪君^{あさくぼ}がクラスに受け入れられるよう、優等生の藍堂^{らんどう}が世話係を務めることになった。

クラスメイトは〈透明人間ごっこ〉と称して“イジリ”を加速させていく。これまでは中立的な立場でうまくやっていた藍堂までが孤立していき、ある日決定的な事件が起こる。



夜フクロウとドッグフィッシュ

ホリー・ゴールドバーグ・スローン／作 メグ・ウォリツァー／作
三辺律子／訳 小学館



エイヴリーの元に一通のメールが届く。「そっちのお父さんとうちのお父さんは付き合ってる！」父親同士の交際をきっかけに、それまで会ったことがない娘二人のメールのやり取りが始まった。二人は結婚を阻止^{そし}するため、あの手この手を考えるうち、次第に心が通じ合っていく。一方、中国旅行に行った父たちは、大ゲンカして別れ話になってしまう。

全編、メール形式でつづられた物語。

サード・プレイス

ささきあり／作 酒井以／絵 フレーベル館



小学生の時は万引きを疑われ、中学に入ってからにはケガで陸上部を挫折。そんなダイには、できると言えるものもやりたいこともない。そんな時、先輩に誘われた場所が〈サプリガーデン〉だった。中高生が利用できる施設で、家でも学校でもない第三の居場所だ。コスプレ企画や無料の食事など利用者が運営に参加できる。ダイは「皆で一緒に」という雰囲気は苦手だったが、ある日学校に行きたくなくて、ふと足を向けた。

とら 囚われのアマル

アイシャ・サイド／作 相良倫子／訳 さ・え・ら書房

パキスタンに住む 12 歳のアマルの夢は、教師になることだ。図書室は男子の学校にしかないが、^{おきななじみ}幼馴染が本を借りてきてくれる。ところがある日、アマルは大地主の無理難題をつっぱねた罰として、屋敷で働くよう命じられる。屋敷に着くなり、携帯電話を奪われたり同僚の少女に目の敵にされたりするが、ここにはなんと図書室があった。こっそり中に入ったアマルは、^{ゆうわく}誘惑に負け詩集を手にする。



さく あき 朔と新

いとうみく／著 講談社



一昨年、兄の朔がバスの事故で視力を失った時、新は母親から「お前のせいだ」となじられた。新は自分を責めるように、打ち込んでいた陸上部を辞める。

当の朔は、ブラインドマラソンをやりたいと言い出し、その伴走者に新を指定する。コースの路面状況などを伝えながら、相手とペースを合わせて走るのは意外に難しい。だがそれ以上に大変なのは、心配する母親の説得だった。

団地のコトリ

八東澄子／著 ポプラ社



団地に住む中学生の美月^{みづき}は、逃がしたインコを捕まえようと階下の柴田老人の家を訪ねる。一人暮らしのはずだが、そこには子どもの気配があった。学校に行っている様子はなく、不審に思いながらも時は過ぎる。やがて、柴田老人が入院し意識不明だという知らせが入った。美月は、階下の部屋の中から「コトリちゃん、助けて」という子どもの声を聞き、やせこけた母子を発見する。

世界とキレル

佐藤まどか／著 あすなる書房

成績は今いちだしクラスでも浮いている、そんな舞^{まい}の楽しみは SNS だ。現実では、女の子らしさと程遠い舞だが、SNS ではかわいくておしゃれな人気者になりすますことができる。

夏休み、3 週間の林間学校に出かけ、写真をアップロードしようとしたところ、スマホを取り上げられてしまう。おまけに收容所なみに管理された生活が待っているらしい。世界と切れてしまうと焦った舞は、山奥からの脱走を試みた。



ルーパートのいた夏

ヒラリー・マッカイ／作 富永星／訳 徳間書店



子どもに関心がない父との生活の中、クラリーにとって何よりの楽しみは、夏に祖父母の家へ行き、いとこのルーパートとゆかいに過ごすことだった。しかし、英国が第一次世界大戦に参戦すると、ルーパートは家族にだまって入隊してしまう。始めは怒っていた祖父も世の中が戦争一色になると出征^{しゅっせい}を讃^{たた}えだした。やがて戦場からは「行方不明」の電報が届いたが、クラリーは搜索^{あきら}を諦めない。

ウィズ・ユー

濱野京子／作 くもん出版



中3の悠人^{ゆうと}は、息抜きのランニング中に知り合った朱音^{あかね}と夜の公園で言葉を交わすようになる。高級なマンションに住み、何不自由なく見えた朱音は、父が単身赴任の中、病気の母を介護し妹の面倒を見ていた。だが友人にも担任にも話せず、一人抱え込んで疲れ果てていた。

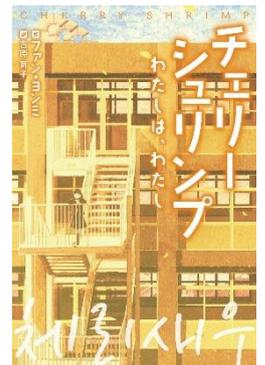
そんな時、悠人は、家族の介護をせざるを得ない若者を指す〈ヤングケアラー〉という言葉を知る。

チェリーシュリンプ わたしは、わたし

ファン・ヨンミ／作 吉原育子／訳 金の星社

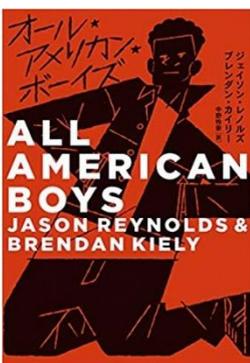
韓国に住むダヒョンは、仲良しグループから孤立することが怖い。友達の塾に忘れ物を届けたり、しょっちゅうプレゼントを贈ったりして、都合のいい子を演じていた。

新学期、グループから嫌われているウンユと同じ課題をすることになったダヒョン。ウンユと親しくなるうちに、彼女の前では自然にふるまえることに気付くが、トークルームではみんなに合わせて悪口を言うってしまう。



オール★アメリカン★ボーイズ

ジェイソン・レノルズ／著 ブレンダン・カイリー／著 中野怜奈／訳 偕成社



黒人高校生のラシャドは、雑貨店で万引きを疑われ、警官に暴力を振るわれた。無抵抗のまま殴られる動画が出回り、学校では「ラシャドは今日もいない」というスローガンのもと、静かな抵抗運動が始まる。警官は、白人生徒クインの知り合いだった。面倒見がいい兄貴分だったのに、なぜそんなことをしたのだろう。そして「警官として仕事をしただけ」という言い分は正しいのか、クインは悩む。